

フォレストからの便り 林業情報のお届け



「コンテナ苗」と「裸苗」

造林用の苗木には異なる2種類の苗木があります。今回は、それぞれの特徴をご紹介します。

それぞれの特徴

裸苗は、苗畑で育てられる従来からの苗で、根が露出した状態で流通される苗のことを指します。植栽した経験がある方も多いのではないのでしょうか？ 裸苗は、根が四方に広がって大きく、細根が多いものが優良とされます。見た目は全体的にがっしりとした印象を受けることが多い苗です。

コンテナ苗は欧米が発祥で、ここ数年で急速に普及している新しいタイプの苗木です。苗畑ではなく専用の育苗容器で育てるため細長い根形となります。また栽培方法の違いから全体的に少しひょろっとした苗の形になります。



画像引用(上):3年生苗を用いた造林の低コスト化 三島貴志他
(下):コンテナ苗生産の手引き 林野庁

それぞれの違い

裸苗とコンテナ苗の違いを表にすると以下の通りになります。

(○を標準とする)

	価格	植栽効率	運搬効率	植栽時期	活着率	植栽後の成長
裸苗	○(200～250円)	○	○	春限定	○	○
コンテナ苗	△(300～350円)	○～◎	×～△	春限定※1	○～◎※2	○～◎※2

※1:低標高地は通年。井川では春に限定される ※2:研究毎にばらつきがみられる

表を補足すると、コンテナ苗のメリットとしては、根が露出している裸苗と比べて、根鉢を形成しているため乾燥に強いと言われています。苗木は乾燥に弱く、乾くと簡単に枯れてしまうため、コンテナ苗はその分活着率(生存率)が高くなるとされています。

井川でのメリットは、その程度で、あとは条件次第(現場次第)というところです。そもそもコンテナ苗の最大の利点は根鉢があることにより、植栽時期が春に限定されないこと。それにより、伐採➡造林までを一つの流れの中で行うことができ、造林作業(地拵えや苗木運搬)の一部を機械に任せることができるため、省力化・低コスト化につながるというものでした。

しかし、井川のような標高が高い地域では、秋～冬植栽は苗の凍上や土壌の凍結により困難であり、春植えが最も確実な方法となります。そのため、コンテナ苗の長所を発揮しづらい地域とも言えます。

『お知らせ』1度、ご連絡ください

苗木ですが、現在は受注生産(注文があった分だけ生産する)が主流となっております。

そのため、苗木の注文から植栽まで、2～3年程度のお時間を頂く場合がございます。ただし、タイミングが良いと植林が中止になった苗木等が出回っていることがあるため、すぐに確保できることもあります。

植林を検討中の方は、1度組合までご連絡頂ければ、その時々に応じた対応をさせていただきます。

現場に合わせて柔軟に

コンテナ苗と裸苗、それぞれの特徴を紹介しました。一長一短があるため、現場(車道からの距離、斜度、土質等々)に合わせて選択をしていくことが重要です。

特に車道から距離がある送電線下等は、コンテナ苗では運搬効率が悪く(裸苗の半分)、費用が割増しになりやすいため、ご注意ください。



コンテナ苗は、車道がある場所に適しています